

事業の結果（まとめ）

「各施設におけるモデル事業の実施状況等」と「事業効果測定の結果」からモデル事業の成果を取りまとめると、次のとおりになるものと考えられる。

1 利用者について

(1) 小グループ活動全体について

自主性の創出

従来の職員だけで内容が決定された集団レクとは異なり、利用者の意思表示や会話が増え、それによって日ごろの小グループ活動の中で次回の活動内容の希望が出されて決定されるようになり、利用者の活動に自主性が生じた。

活動意欲の向上

小グループ化により、楽しみややりがいを多く感じる（利用者質問3）のみならず、多面性・発展性のあるきめ細かな活動が可能になり、利用者が活動内容に興味を持ち（利用者質問2）、その活動に打ち込む活動意欲が向上した。

残存能力の発揮、自己実現

活動の活発化や意欲の向上により、あまり用いることのなかった身体機能や以前特技としていた能力を発揮するようになり、利用者自身が自らの能力に気づいて自信を持ち、楽しみややりがいを見つけて行動を起こすようになった。

心身機能の向上

身体、社会性、認知、感情に係る各面の機能が向上した（MARRCC）。

なお、「認知症予防・支援マニュアル」（介護予防サービス評価研究委員会／認知症予防・支援についての研究班）によると、認知症予防に係る介護予防一般高齢者施策では「いくつかのプログラムを用意し、個人の好みによってプログラムを選択してもらう」「小さな集団で活動を行うこと」が効果的としているが、このことは認知症予防に限らず、広く介護予防に当てはまるものとする。

自宅での継続性

自宅に材料等を持ち帰って活動を続ける利用者が現れたほか、家族との会話や孫との接触が増加したり、自宅で活動の準備をしたりする利用者がいたなど、自宅で実際に施設での活

動と同じことはしなくても、小グループ活動が日常生活の一端に組み込まれ活動の継続意欲が伺われた（利用者質問7、家族質問7）。

日常生活行動の活性化

～により日常生活行動も活性化し、在宅における自主的な介護予防の取組が促進されたことが期待できる（利用者質問8で2のとき、家族質問8）。

なお、アンケート調査では全般に統計的有意差が見られず、また、事業効果測定の中には想定した結果が得られなかったものもあったが、事後調査の実施時期となった冬の2月には、一般に意欲や活動状況の減退が見られること（モデル事業実施施設による。）小グループ活動に集中しすぎて、中には疲労した利用者が見られたこと、アンケート調査等の調査項目の設定や調査手法が十分確立されていないものであったこと等が原因であったと考えられる。

(2) 効果の相関分析

利用者アンケート等及びMARRCCのクロス集計（-5、6）の結果によると、次のような分析が可能であると考えられる

小グループ活動により、利用者のニーズに合った活動内容（-5-(1)、(3)）を提供し、利用者が楽しみややりがいを感じる（-5-(2)）ことによって、活動意欲が高まる。

活動意欲が高まれば、自宅での継続性が生まれ（-5-(4)、(5)）、日常生活行動を活性化させる（-5-(6)、(7)）。

活動意欲や自宅での継続活動、日常生活行動の活性化等は心身機能を向上させる要素となる。（-6）

(3) サービス内容のあり方について

利用者アンケートのグループ別集計（-4）の結果によると、「その他グループ」は総じてモデル事業実施前と実施後で大きな改善を示した項目は少なかった。

それに対し、ゲーム機器等活用グループと物品作成等グループについては、各施設からの状況報告等も加味して、次のような結果であったと考えられる。

ゲーム機器等の活用

職員の中にはゲーム機器等の導入に半信半疑の者もあり、ゲーム機器等活用グループに参

加した利用者の中には、ほかに参加したいものがなかったなど消極的な動機も見られた（「グループ希望の理由」）が、多くの利用者は、活動内容自体は非常に楽しんでおり（利用者質問1）、家族や友人と一緒にしてみたいと思っている（利用者質問7）。

これまでゲーム機器等に触れたこともない高齢者でもおおむねゲーム機器が受け入れられており、従来型のサービス内容にとらわれず、高齢者の楽しみや興味も多様で潜在的な可能性を見出すことができた。

また、これらの活動により、日常生活に何らかの変化があった利用者の割合が他のグループと比べて最も高かった（家族質問8）。

さらに、MARRCCの結果を見ると、7.44点（満点）の割合が、その他のグループでは減少したのに対し約7ポイント増加するなど、心身機能の向上の成果も現れている。とりわけ、社会的機能が顕著に向上した。（-2-(2)）

しかしながら、活動内容に発展性や創意工夫の余地が少ないこと等から、今後も積極的に参加するかどうかの意欲の面では低下の傾向も見られ（利用者質問5）、また、ゲーム機器を自宅でも購入するまでにはなかなか至らず、自宅で同様の活動をするなどの継続性についてもさらに改善の余地がある（利用者質問6）ものと考えられる。

ゲーム機器等の有効な活用方法としては、デイサービスセンター等に通所する高齢者の機能訓練を目的とする場合等が考えられる。

物品作成等

物品作成等グループ等に参加した利用者の多くは、他のグループと異なって、今後の参加への意欲（利用者質問5）や自宅等での継続の意欲（利用者質問7）が高くなっている。実際、自宅に材料等を持ち帰ってデイサービスセンターで行っている活動を続けたり、自宅で活動の準備をしたりする利用者も見られた（利用者質問6）。

また、これらの活動により、日常生活に何らかの変化があった利用者の割合がその他のグループと比べて高かった（家族質問8）。

さらに、MARRCCの結果を見ると、7.44点（満点）の割合が、その他のグループでは減少したのに対し約14ポイント増加するなど、心身機能の向上の成果も現れている。とりわけ、認知・知的機能及び感情・精神が顕著に向上した。（-2-(3)、(4)）

物品作成等の具体的な活動内容の決定や運営に当たっては、職員の個別援助能力によるところが大きい。個人の世界で行う単純作業で発展性の幅が狭いものよりも、活動内容が段階的で多面性があり、利用者役割分担が可能でコミュニケーションが多様に行われたものの方が、利用者の意欲や自主性の創出の効果が高いとする意見があった。

また、自らが作成した物品の販売や地域の公共施設等への提供が実施され、これまでのデイサービスセンターの視点では希薄であった「高齢者側からの社会貢献・社会参加によるやりがいづくり」が、高齢者の意欲や自主性の創出につながることが実証されたと言える。

(4) ターゲットについて

男女別

男女別に見ると、男性の方が今後の参加への意欲を高める利用者が多く（利用者質問5）、また自宅等での継続の意欲を高め又は少なくとも維持する利用者が多い（利用者質問7）。

また、男性の方が、自宅でも同様の活動をする（利用者質問6）や、日常生活で何か楽しいことややりがいのあることをすること（利用者質問8）について、事業実施前と比べて少なくとも維持するとした利用者が多い。

この結果、小グループ活動によって、男性は具体の活動意欲が向上し、何らかの行動に結びついているものと言える。

一方、女性は、日常生活で何か楽しいことややりがいのあることをしたいとする意欲（利用者質問8で2のとき）や生きがいを感じる程度（利用者質問9）について効果が見られた。

この結果、小グループ活動によって、女性は必ずしも活動に限定されない広い充足感が得られたのではないかと思われる。

MARRCCの結果を見ると、男女ともに心身機能の向上の成果が現れている。（-2-(5)）各機能別に見ると、女性は社会的機能、認知・知的機能、感情・精神（ $p<0.01$ ）が、男性は感情・精神（ $p<0.05$ ）が顕著に向上しており（-2-(2)、(3)、(4)）、心身機能については、女性の方がやや効果が高いことがうかがわれる。

以上から、小グループ活動によって、内容は異なるものの男女とも効果が見られており、双方ともターゲットにすることが可能であると考ええる。

要介護度別、認知症の程度別

要介護度別及び認知症の程度別に見ると、今後の参加への意欲（利用者質問5）や自宅等での継続の意欲（利用者質問7）、日常生活で何か楽しいことややりがいのあることをする意欲（利用者質問8で2のとき）について、いずれも軽度者の方が向上させた利用者が多い。

一方で、小グループ活動を楽しみ・やりがいがあると感じ（利用者質問1）、生きがいを感じる（利用者質問9）とする利用者については重度者にも見られており、また自宅でも同様の活動をする（利用者質問6）や、日常生活で何か楽しいことややりがいのあることをすること（利用者質問8）についても重度者に効果がある面もある。

この結果、小グループ活動では、重度者に対して、自主的な意欲創出までには至らなくとも、受動的な効果には結びついているものと言える。

MARRCCの結果を見ると、軽度者には心身機能の向上の成果が顕著に現れており、各機能別で見ても、身体的機能、社会的機能、認知・知的機能、感情・精神のすべての面で顕著に向上したが、重度者に対しては心身機能の向上には至っていない。（-2）

以上から、軽度者については小グループ活動による介護予防の効果が高いことから、高齢者が軽度の段階から早期に取り組む体制を整備する必要があると考える。

一方、重度者については小グループ活動により目に見える効果が直ちに現れるというわけではないが、楽しみ・やりがいや生きがいを感じる効果が見られたことから、要介護状態等の悪化を防止することを目的に、無理なく長期的に進めていくことが重要であると思われる。

2 職員について

個別ケアの実現

これまでの集団レクでは楽しめて盛り上がるよう職員が主導する傾向がうかがえたが、小グループ活動によって個別ケアの環境が整ったと同時に、利用者の自主性、意欲や自宅での継続の必要性に職員が気づき、次の個別ケア能力が高まった（職員質問1）。

利用者一人ひとりの多様で隠れがちなニーズの把握ができるようになった（職員質問7、11）。

個別のニーズに合う活動を考える企画力・創造力が高まった（職員質問8、20）。

利用者一人ひとりに目標設定（職員質問9）をし、意図的な援助（職員質問12）と評価（職員質問14）ができるようになった。

利用者の意欲を起こし、主体的に活動してもらうサポート力が高まった。

3 ボランティアについて

新たなボランティア像の提示

高齢者福祉施設におけるボランティアについては、従来は自分の特技を教えたり披露するものが中心であったが、利用者の自立をサポートする新たなボランティア像が受け入れられ、ボランティア自身の生きがいとなった（ボランティア質問10）。

ボランティア研修の必要性の再認識

元気高齢者といえども高齢者福祉施設や高齢者の身体機能の状況、認知症等について熟知していないケースが多く、高齢者施設における円滑なボランティア活動のためには、一定の研修が必要であることが分かった。